

(二〇二二年度一般選抜C)

国語問題 (六〇分) (この問題冊子は表紙を除き十一ページである。)

受験についての注意

- 一、 監督の指示があるまで、問題を開いてはならない。
- 二、 携帯電話・スマートフォンの電源は切ること。
- 三、 時計に組み込まれたアラーム機能、計算機能、辞書機能などを使用してはならない。
- 四、 試験開始前に、監督からが指示があったら、解答用紙の受験番号欄の番号が自分の受験番号かどうかを確認し、氏名を記入すること。
- 五、 解答用紙は三枚ある。解答は解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはならない。
- 六、 監督から試験開始の合図があったら、この問題の冊子が、右に記したページ数通りそろっているかどうか確かめること。
- 七、 筆記具は、H、F、HBの黒鉛筆またはシャープペンシルに限る。万年筆やボールペンなどを使用してはならない。訂正する場合は、消しゴムで丁寧に消すこと。消しすぎはきれいに取り除くこと。
- 八、 解答用紙を折り曲げたり、破ったりしてはならない。
- 九、 試験時間中に退場してはならない。
- 十、 問題冊子と解答用紙を持ち帰ってはならない。

以下の文章を読み、設問に答えなさい。

私たち人間には、さまざまな能力が備わっている。それらの能力をひっくり返して、知情意と呼ぶことがある。知情意の「知」とは、知ること、つまり感覚や判断や推論によって知識を手に入れる働きのことである。「情」とは、喜怒哀楽の感情やその他さまざまな情動の働きを指す。そして「意」とは、何かを欲求し、それを実現しようとする意志のことを意味する。自分を含め、すべての人間のうちに知情意の働きがあることを認めないという人はいないだろう。

(あ)、「霊性 (Spirituality)」はどうだろうか。人間に知情意の働きが備わっていることは容易に認められるのは対照的に、霊性が人間に備わっているかどうかについては意見が大きく分かれるに違いない。そもそも霊性という言葉自体が一般に(1) 馴染みのある言葉ではない。霊という語から連想されるのは、幽霊、靈感、霊能力といった言葉かもしれない。そのため、霊性とは、幽霊のような一般の人には見ることのできない存在を感じとる、特別な人にだけ与えられた不思議な能力であるとか、あるいは、後ろめたいことがあるから実際には存在しないものを存在すると誤って思い込んでしまう心の弱さだといった誤解が生まれることになる。

(い) 洋の東西を問わず、その文化的宗教的伝統のうちで、霊性は人間の根本的な可能性であり、その次元に気づくことが人間にとって極めて重要なことだと理解されてきた歴史がある。十二〜十三世紀イタリアの聖人アッシジのフランシスコに由来すると見なされてきた「平和の祈り」を例にとって説明してみたい。

神よ、

わたしをあなたの平和の道具としてお使いください。

憎しみのあるところに愛を、

いさかいのあるところにゆるしを、

分裂のあるところに一致を、

疑惑のあるところに信仰を、

誤っているところに真理を、

絶望のあるところに希望を、

闇に光を、

悲しみのあるところに喜びをもたらすものとしてください。

慰められるよりは慰めることを、

理解されるよりは理解することを、

愛されるよりは愛することを、わたしが求めますように。

わたしたちは、与えるから受け、ゆるすからゆるされ、

自分を捨てて死に、

永遠のいのちをいただくのですから。

(女子パウロ修道会公式サイトより <https://www.pauline.or.jp/prayingtime/peace01.php> 二〇二二年二月十八日閲覧)

私を平和の実現のための道具にしてください、と呼びかけるこの祈りの姿勢は、① 自分にとっての便益に執着する自己中心な態度とは全く別次元のものである。自分の（ア）こうせきを誇示する素振りはどこにもなく、どこまでも謙虚に徹する颯爽とした生き様が見て取れる。ここに示されているのは、一方で、人間が我執ゆえに多くの罪悪にまみれ、互いに諍いの絶えない存在であることを深く受け止めつつも、他方で、自分のいのちが自分のうちに閉じたものではなく、自分を超えたところから自分が丸ごと与えられているという根本的事実を自覚し、そのことに感謝と責任を覚える姿勢である。こうしたことを可能にする力は、人間に予め備わっている知情意の能力と無関係とは言えないが、これらの能力だけで説明できるものではない。（う）、自分を超えたものが自分を貫いて働いているという自覚、言い換えれば、自分が自分を超えた存在によって支えられ、守られ、同時に呼び掛けられているという交わりの自覚がある。本来の自分とは個人主義的に捉えられた自我ではなく、むしろ自分を超えたものとの生きた交流そのものであるという自覚こそが、霊性の根本的な特徴なのである。

以上の説明を聞いて、なるほどそういうことかと納得してくれる人もいるかもしれないが、反対に、そのような交わりとして意識される霊性自身が単なる主観的な思い込みに過ぎないのではないかという疑念を抱く人も少なくないだろう。私たちが生きていく近代以降の社会は、科学が幅を（イ）きかせる世の中である。科学の特徴は、仮説を立て、それを実験によって検証し、実際に検証できた仮説のみを真理と認めるところにある。誰であっても同じ実験手続きを行えば、その仮説の正しさを確認することができる、そうしたすべての人に開かれた知識だけが真理の名に値すると見なすのが科学の立場である。こうした② 科学における真理基準に照らし合わせるならば、霊性の経験は、実験によって確かめるといふわけにはいかず、そもそも反証可能性さえ欠くため、真理とは認められないということになるだろう。

しかし、私たちは、真理がすべての人に開かれているということを承認するその一方で、特別な訓練を行い、時間をかけて専門的な能力を身につけた人にしか窺い知ることのできない世界があるということをも認めて生きている。一流のプロ野球選手には、素人には信じられないことだが、球が止まって見えるということがあるらしいし、ベテランの（ウ）たくえつした看護師には、患者を取り巻く複雑な状況が手にとるように見渡せるようだが、それは新人看護師にはとうてい期待できないことである。（え）、努力を継続し経験を積み重ねることによって、以前には見えなかったことが見えるようになり、一般の人には思いもよらないことができるようになるといった事例を認めることができる。だが（2）翻って考えれば、科学的実験もまたその例外ではなく、専門的な理論に通じ、特殊な実験の技法を修得した科学者でなければ適切に行うことはできない。一般の人が自分の目で直接に検証することはできないという点では、科学的真理であれ、専門的技術であれ、また霊性の経験であれ変わるところはないはずである。にもかかわらず、科学的真理や専門的技術にはすぐに信頼を置くことができるのに、霊性の経験は認めにくいといった傾向があることは否みがたい。その理由は何だろうか。

一つ考えられることは、次のようなことである。科学の成果が応用されて新しい技術が誕生し、それが社会に（3）浸透していくと、その結果として、生活環境に大きな変化が生じる。例えば新たな科学技術の開発によってパソコンやスマホが作られ、それが社会に普及していくと、人々のコミュニケーションのあり方や仕事の仕方などが大きく変わっていくが、こうした変化は誰の目にも明らかである。そのため、自分では実験によって科学的真理を検証することができなくても、生活環境の変化を通して科学の威力を感じ、それをもたらした科学的理論の正しさを認めないわけにはいかなくなるのである。（お）、専門的技術の場合にも同様のことが言える。技能を身につけた人がそれを有していない人に比べ、遥かに優れた成果を挙げうることは素人の目にも歴然としているからである。

では、改めて問おう。霊性の経験は、どうだろうか。科学者でなくとも、科学の力の大きさを認めることができるのと同様に、霊性の次元を自分で自覚することはできなくとも、霊性の経験が社会を変えることもあるのではないだろうか。この問いに対し、その通りだ、と答えたいと思う。例えば、無抵抗の平和運動を貫いてインドの独立をかち得たマハトマ・ガンジーや、孤独のうち死を待つ人々に寄り添い続けたマザー・テレサの活動などを思い起こして欲しい。彼らの活動が深い霊性の経験に基づいていたことには、多くの証言がある。霊性の経験もまた社会に大きな変化をもたらすという点では、科学技術や専門的技能に決して引けをとるものではないのである。だがそれでも、ニュースなどで彼らを偉人として認知することはできても、彼らの活動している姿やその恩恵を身近に感じることができない場合、その人物像や態度、また発した言葉に特別な関心を寄せない限り、霊性の経験が社会変革の力になっていくことはなかなか実感できないものであろう。

では、霊性の自覚とは、特別な宗教経験に与ることのできた人や、その人の活動による恩恵を直接に被った人にだけに認められるものであり、その他の人には近づきえないものなのだろうか。(A) そうではないと思う。少し遠回りになるが、以下にそのことを説明してみたい。

世界保健機関(WHO)は、一九四八年に発効した「世界保健機関憲章」の前文において、「健康」を「身体的・精神的・社会的に完全に良好な状態であり、たんに病気になるいは虚弱でないことではない」と定義した。病気がないならそれでよいというのは、保健政策としては不十分であり、人間が生きる多様な側面にしっかりと目を向けて、良好な状態を維持・回復・促進できるようにすべきだという考えである。こうした見方はその後も継承されているが、一九九九年の総会では、健康概念について定義の更新が提案された。それは、「健康とは身体的・精神的・霊的(spiritual)・社会的に完全に良好な動的(dynamic)状態であり、たんに病気になるいは虚弱でないことではない」というものであり、新たに「霊的」と「動的」という二つの表現が加えられたのであ

る。「動的」という表現については、今は擱く。「靈的」という表現を加えるように提案したのは東地中海地域事務局であった。彼らはイスラム医学の伝統に則って、近代医療とは異なる文化的宗教的な背景をもった健康観を提案したものと考えられている。審議の結果、新しい定義が正式に採用されることはなかったものの、新しい定義は広く世に知られるようになり、その意義は今日まで継続して議論されている。伝統的医療は、実験医学に基づく近代的医療とは異なった前提の上に立つ。それは近代的医療の世界から見ると、前近代的で非合理的なものに見えるかも知れない。しかしそうした理由によって伝統的医療を排除することは本来に望ましいことなのか。例えば、末期がんにかかり、治療の見込みがない場合、近代的医療はそうした患者を医療の対象から除外しようとしがちである。それは本当に正しい姿勢なのだろうか。そうした問題意識が背景にある。

末期患者の苦痛の(4)緩和を目的としたホスピスの設営に尽力したイギリスの医師シシリー・ソンドースは、「全人的苦痛(total pain)」という概念を提唱した。終末期を迎えた患者は、「身体的苦痛」だけでなく、家族から離れ孤独を強いられるといった「精神的苦痛」や、社会的な貢献が何もできずお荷物になってしまったという「社会的苦痛」を覚えるが、それだけでなく「スピリチュアルな苦痛(spiritual pain)」をも抱くという。全人的苦痛とは、以上の四つの要因が複雑に絡み合った痛みのことであり、そのすべてを視野に入れることができないと適切な緩和ケアは成り立たないとソンドースは主張したのである。では、スピリチュアルな苦痛が、精神的苦痛とは異なったものとして提示された理由は何だろうか。終末期においては、味気ない入院生活は耐えられないとか、家族に会えず寂しいといった精神的苦痛だけでなく、なぜよりによってこの私がこんなに苦しい思いをしなければいけないのか、生きていることにどんな意味があるのだろうか、死んだら一体どうなるのかといった、苦しみの意味や人生の意味への問いなどが心の奥底から湧き出して、それが苦痛として感じられるようになる。これがスピリチュアルな苦痛である。精神的苦痛とスピリチュアルな苦痛は必ずしも明確に分けられるものではないが、精神的苦痛が(エ)いやされたとしても、スピリチュ

アルな苦痛は残り続けるといった事態は十分に考えられる。それは医療的措置や生活環境の改善だけで解決できるものではない。宗教的次元における救いにかかわる痛みなのである。

スピリチュアルな苦痛は、死期が迫ったときに切実に実感されるものであるが、心身が健康であつても自覚されることのある痛みである。人間は、健康か病気かにかかわらず、みな生まれてきて死にゆくものである。人生は死と切り離せない。その意味では、スピリチュアルな苦痛とは、普段は押し隠されているため気づかないが、実は誰もが心の奥底で感じている痛みであるということもできよう。自分のいのちが個として閉じたものであるのなら、死とは私がこの世から消えることであり、私とともに世界が無くなることである。③ スピリチュアルな苦痛とは、私が自己のうちで私を超えたものへと繋がりたいと願う切なる思いが満たされない苦しみであるということもできよう。誰もが少なくとも潜在的にはスピリチュアルな苦痛を感じているということは、靈性の次元が、特別なひとだけに開かれたものではなく、すべての人間に開かれた可能性であり、すべての人が心の奥底で乞い求めていることを物語るものではないだろうか。WHOの総会において提案された健康の新たな定義の試みは、人間にスピリチュアルな次元があることを認めさせようとするものであったとも言えるだろう。

スピリチュアルな苦痛という概念は、靈性の次元への(5) 渴望 が、愛する人に先立たれるとか、自分に死期が迫るといった、極度の不幸に(オ) そうぐう する場面で自覚されることに気づかせてくれる。しかし、靈性の次元への目覚めは、そうした否定的経験の場面に限られるものではない。西洋哲学と禅宗に通じ、独自の宗教哲学を打ち立てた西谷啓治は、日向ぼっこをしていると、太陽と静かに話しあっているという感じがして、「なにかいのちの底のない底とでもいうような所へずっとつながっているということがなんとなく感ぜられて、そこに無限な静かさというか、或いは無限なしじまというか、沈黙というか、そういう感じがするのです」(『宗教と非宗教の間』岩波現代文庫、五頁)と語っている。日常のさりげない時間のうちにも、靈性の経験の可能性は

開かれているのである。

そもそも靈性 (spirituality) の語源は、ラテン語の spiritus であるが、その第一の意味は「息」である。この語はさらに、ヘブライ語「ルーアツハ」やギリシア語「プネウマ」に由来し、息・息吹・風を意味する。神の靈は、息や風のように目には見えないが、人間を内側から生かし、動かす力として感受されてきたのである。これは視点を変えるなら、そよ風に触れるといった日々の感覚的経験が、そのまま靈性の次元を開く窓となることがあるということを示唆している。日常生活のなかにも、神の靈を感じとることのできる靈性の次元が開かれているのである。人間は自分の内に閉ざされているのではない。すべてを生かす根源のないのちへと開かれて生きることができるのである。

そうした次元に開かれると、味気なく感じられていた日々の生活が喜びとともに新鮮なものとして甦って感じられようになる。イエス・キリストは、次のように語ったといわれる。「誰でも水と靈とから生まれなければ、神の国に入ることとはできない。肉から生まれたものは肉である。靈から生まれたものは靈である。『あなたがたは新たに生まれなければならぬ』とあなたに言ったことに、驚いてはならない。風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くかを知らない。靈から生まれる者も皆そのとおりである」(「ヨハネ福音書」第三章第五節〜第八節、聖書協会共同訳)。自分が神の靈を受けて生きていくことを実感できれば、自分が変わり、人生が蘇る。(B) 科学技術が自分を変わずに世界を変えようとする営みであるのに対し、靈性の経験は自分が変わることを通して世界が変わることを知る経験である。自分は一人ぼっちではない。自分は自分を超えて自分を包む根源のないのちへと開かれている。その実感が靈性の経験なのである。

問一 傍線部(1)から(5)の読みをひらがなで書きなさい。(配点各一点)

問二 傍線部(ア)から(オ)を漢字に直しなさい。(配点各一点)

問三 (あ)から(お)の空欄に入る語として適切なものを次の中から選び、その記号を記しなさい。なお、同じ語が二度用いられることはないものとする。(配点各一点)

A また

B しかし

C そこには

D では

E このように

問四 傍線部①自分にとっての便益に執着する自己中心的な態度とは全く別次元のものであるについて、筆者の意見と異なるものを、次の中から一つ選び、その記号を記しなさい。(配点五点)

A 「平和の祈り」は、人々が争いを止め、互いに愛しあうことができるように求めている。

- B 「平和の祈り」は、分裂している人々が互いに一致しあうために、自分が役立つことを求めている。
- C 「平和の祈り」は、自分が相手を率先して理解することによって、相手からも理解してもらおうことを求めている。
- D 「平和の祈り」は、自分が平和の器となることによって、絶望している人々に希望をもたらさうことを求めている。
- E 「平和の祈り」は、自分のいのちを平和の実現のために捧げ、死後自分が人々に評価されることを求めている。

問五

傍線部② 科学における真理基準 について、筆者の意見として最も適切なものを、次の中から一つ選び、その記号を記しなさい。(配点五点)

- A 科学とは、疑うことのできない絶対に確実な真理を追求する営みである。
- B 科学とは、観察した多様な事実から普遍的法則を演繹しようとする営みである。
- C 科学とは、誰にでも認められる客観的真理を求める営みである。
- D 科学とは、予測した仮説を立て、それを実験によって反証する営みである。
- E 科学とは、特別な能力をもった人の直観がものを言う営みである。

問六

傍線部(A) そうではない、という主張の理由を、六〇〜七〇字で説明しなさい。(配点五点)

問七

傍線部③ スピリチュアルな苦痛とは、私が自己のうちで私を超えたものへと繋がりたいと願う切なる思いが満たされな
い苦しみであるということもできよう について、筆者の意見として最も適切なものを、次の中から一つ選び、その記号を記
しなさい。(配点五点)

- A スピリチュアルな苦痛とは、精神的な痛みのことであり、親しい人との繋がりが絶たれたときに感じる苦しみである。
- B スピリチュアルな苦痛とは、心身複合体である人間が感じる苦しみの総称である。
- C スピリチュアルな苦痛とは、治療の見込みがなくなってしまう末期患者のみが感じる心の苦しみである。
- D スピリチュアルな苦痛とは、死後に待つ世界に対する恐れから生じる苦しみである。
- E スピリチュアルな苦痛とは、人生の意味を自分で満たすことができず、自分を超えた存在を渴望する苦しみである。

問八

傍線部(B) 科学技術が自分はずに世界を変えようとする営みであるのに対し、霊性の経験は自分が変わること
を通して世界が変わることを知る経験である について、まず(1)「自分は変わらずに世界を変えようとする営み」とは何を
意味するか、六〇〜七〇字で説明しなさい。次に(2)「自分が変わることを通して世界が変わることを知る経験」とは何を
意味するか、六〇〜七〇字で説明しなさい。最後に(3)筆者の意見に対するあなたの考えを、理由を挙げ、六〇〜七〇字
で述べなさい。(配点十五点)